

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23076

研究課題名(和文) 現実の記録と告発のためのリアリズム：マンゾーニ『婚約者』決定版のレトリック

研究課題名(英文) Realism for the documentation and denunciation: the rhetoric of the definitive edition of Manzoni's "The Betrothed"

研究代表者

霜田 洋祐 (Shimoda, Yosuke)

大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・講師

研究者番号：80849034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：イタリア近代文学を代表する文学者アレッサンドロ・マンゾーニの主著『婚約者』の写実的表現を、初版から決定版への改訂における重要な変更点 (a) 小作品『汚名柱の記』の追加、(b) 著者の指示による挿絵の導入、に着目して分析した。これにより、『婚約者』は、歴史小説でありながらフランスの写実小説に先駆けて「リアリズム」に到達しているとも考えられる点で重要な作品であるが、この小説のリアリズムが、単なる美学的要請によるものではなく、社会の不正を記録・告発しようという意図や読者に対する教育的配慮とも密接に関わっていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イタリア近代文学を代表する小説『婚約者』を、最新の研究の成果を踏まえて決定版に付加された要素から分析し、その「歴史的リアリズム」が不正の告発や読者の教育といった企図とも密接に結びつくことを明らかにした。本研究は、『婚約者』という作品を西洋文学の文脈に位置付ける一方、19世紀のリアリズムをフランスの小説を典型例として捉えようとする見方を周縁の文学の視点から問い直すことにも繋がるものである。また、「疫病文学」として注目されるようになったこのイタリア文学の傑作を、迷信(フェイクニュース)の流布、強要された自白のみが証拠の冤罪といった今日の問題と関連づけて紹介すること自体にも意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to analyze the realistic representation of The Betrothed (I promessi sposi), the masterpiece of Alessandro Manzoni, one of the leading literary figures of modern Italian literature, with particular attention to the important changes in the revision from the first to the definitive edition: (a) the addition of the small work "Storia della colonna infame" and (b) the introduction of illustrations at the author's direction. The Betrothed is an important work in that, although it is a historical novel, it can be considered to have achieved 'realism' before the French realist novel, but the realism of the novel is not merely an aesthetic requirement, but is also required by the intention to record and accuse social injustice and by educational considerations for the reader.

研究分野：イタリア近代文学

キーワード：イタリア近代文学 『婚約者』 『汚名柱の記』 近代小説 リアリズム 疫病文学 語り的手法

1. 研究開始当初の背景

イタリア近代文学を代表する作家アレッサンドロ・マンゾーニ (1785-1875)の名著『婚約者』/*promessi sposi*は、小説の発達が遅れたイタリアにおける最初の「近代小説」ともされ、発表直後から国際的にヒットした作品である。イタリアでは今日まで広く読まれ続けている国民小説であることから、研究の蓄積も膨大である。19世紀初めの西欧を席卷した歴史小説のブームのなかで生まれた多くの作品とは異なり、『婚約者』には「歴史的リアリズム」と呼ばれる特徴が備わることまでは認識されているが、イタリアではどうしても「国民小説」である『婚約者』の独自性・唯一性が強調されがちで、この作品を西洋文学史の文脈に置いて、19世紀のリアリズム小説との関係を明瞭にする作業は、未だ十分に進んでいるとは言い難い。

一方、近年の『婚約者』研究は、狭義の『婚約者』本篇のテキストのみを対象としてきた旧来の研究を批判し、決定版において付加された要素を含む全体を一つの作品として捉えるべきだと説いている。『婚約者』決定版の巻末に付された『汚名柱の記』は、初版に欠けていた「最後の章」(Palumbo 2014)ともみなすべき作品であり、本篇の物語の背景となる史実[1630年のミラノのペスト]に取材し、当時実際に起きた冤罪事件を扱ったノンフィクション/ドキュメンタリーである。また、19世紀の新しい版画技術によって作成された挿絵は、著者マンゾーニ自身の企画によって入れられたものである。この二つの要素は、個々に重要であるだけでなく、『婚約者』という作品全体の理解にも寄与するものであり、実際、両要素に注目した画期的な研究成果も現れつつある (Brogi 2018; Nigro 2018)。

以上を踏まえて、『婚約者』決定版に付加された補完要素を、特に迫真性や現実感を演出するレトリックという観点から分析するならば、決定版研究の成果を取り入れつつ、『婚約者』という作品を、リアリズム小説の発展という西洋文学全体の流れの中に位置付ける作業を前に進めることができると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、《文学史においては通常、歴史小説ブームを経て舞台を同時代に移すことによって誕生したとされるリアリズムに、『婚約者』が歴史小説でありながら到達している》という前提(「歴史的リアリズム」)のもと、リアリズム小説の発展の流れの中に『婚約者』を位置付ける作業の一つのステップを担う。

『婚約者』決定版の付録的作品『汚名柱の記』と、マンゾーニ本人が描かれるべき主題や配置を考えた挿絵の重要性を認め、両者を含めた全体こそが『婚約者』決定版であると捉える近年の研究の成果を十分に踏まえたうえで、本研究は、そうした付加要素を、特に迫真性や現実感を演出するレトリックという観点から分析する。これによって、物語本篇のテキストに見られるリアリズムの特徴が、著者マンゾーニの単純な歴史へこだわりや純粋に美学的な要請のみならず、不正の告発や読者の教育といった企図(マンゾーニも含むミラノのロマン派知識人が18世紀後半の啓蒙の世代から引き継いだプログラム)とも関連していることを明らかにすることが本研究の目的である。

この研究がうまく進めば、間接的に《『婚約者』が歴史小説でありながらリアリズムに到達している》という前提の正しさを確認することにもなると思われるが、そのことは、19世紀のリアリズムをフランスの小説を典型例として捉えようとする見方を周縁の文学の視点から問い直すことに繋がると言える。

3. 研究の方法

(1) まず、『婚約者』の決定版に追加された2つの要素のうちの一つ、『汚名柱の記』に見られる告発のレトリックに着目する。フィクションの物語を含む本篇から切り離されている『汚名柱の記』には、過去に実際に起きた不正を告発しようという著者の企図がはっきりと見てとれるが、こうした目的のためには、読者に事件を現実のものと感じさせることが肝要となる。そのために用いられた様々な手法を、『汚名柱の記』で引用されている18世紀ミラノの啓蒙思想家たちの作品(チェーザレ・ベッカリーア『犯罪と刑罰』、ピエトロ・ヴェッリ『拷問に関する諸考察』)に見られる「告発のレトリック」とも比較しながら、丹念に分析する。とりわけ注目するのは、著者が自ら語る事件の成り行きに(怒りのあまり)驚きあきれるさまを見せることによって、読者にあるべき姿(理想)と起こってしまったこと(現実)の乖離に気付かせるという手法である。そして、告発に寄与していると考えられるこのようなレトリックが、実は『婚約者』本篇に見られるレトリック(フィクションを“現実的なもの”と感じさせるための手法)と同型となっていることを確認する。これによって、物語本篇だけの分析では見えにくかった、告発の意図とリアリズムの手法との結びつきを明らかにする。なお、『汚名柱の記』は、冤罪が作りあげられていく過程を裁判記録から詳しくしてゆき、そこに著者の考察が書き連ねられているという構成ゆえに、『婚約者』本篇の物語に比べて、かなり難解なテキストとなっている。そのレトリックを精緻に分析するには、本文の正確な読解が不可欠であるため、テキストの全訳を準備することにした。

(2)また、『婚約者』決定版において追加されたもう一つの要素、挿絵については、それが担う“現実”の記録と説明という効果に着目する。挿絵は『婚約者』本篇にも『汚名柱の記』にも同じように付けられているが、ノンフィクションである後者の挿絵には、ドキュメンタリー性格が顕著に見られる。これを手がかりに『婚約者』の歴史叙述部分でも挿絵がドキュメンタリーの効果を担っていることを確認し、さらに、それを補助線とすることによって、物語本篇の、綿密な時代考証に基づくフィクションの部分においては、挿絵が現実感(リアリティ)を演出するものとしての機能も担っていることを明らかにする。また、マンゾーニ自身が主題や本文との位置関係まで決めた挿絵は、より一般的には、本文と補い合いながら読者の理解を助ける説明的性格を帯びていると考えられるが、そのことを、名場面を好んで描くようなエンターテインメント性の強い挿絵(同時代の別の作家の小説や無許可の海賊版『婚約者』の挿絵)との比較を通じて、より明瞭に示す。

4. 研究成果

本研究の開始から半年ほどで新型コロナウイルスの感染が世界的に広がったことにより、本研究は大きな影響を受けた。一方では、イタリアからの研究者招聘やイタリアでの資料収集が行えなくなったため、予定よりも研究の進展が遅れたという負の影響があった。そのなかでも翻訳と挿絵を含む広義のテキストの分析を進めて前項の(1)(2)の方法で、付録的作品である『汚名柱の記』のレトリック(およびそこに見てとられる著者の企図)から『婚約者』全体のリアリズムを問い直すという当初の目的は一定程度達成された。他方、この間に、マンゾーニの『婚約者』や『汚名柱の記』は、17世紀のペスト禍を扱った「疫病文学」とも言える作品として、国内外で注目され、都市封鎖された町の様子や迷信(フェイクニュース)が蔓延る過程を描写した章を中心に再読されたが、このことは、予期していなかった形で本研究に新たな知見をもたらした。『婚約者』の第31, 32章はフィクションの物語を排した歴史叙述的章となっており、当初その中の一挿話となるはずだったものから派生して固有のスペースを与えられたのが『汚名柱の記』であるから、この部分に共通点が見られるのは当然とも言える。ただ、『婚約者』の第31, 32章やその周辺を社会的要請にしたがって再度精読し、それを『汚名柱の記』のテキストと比べることによって、事実を伝えようとするレトリックの技法においても、両部分にかなりの連続性が見られることが明瞭になった。挿絵のドキュメンタリー性格に注目していたことにより、それと関連して、一次資料の引用(第31, 32章ではファクシミリも利用される)の手法の類似性がよく見えるようにもなった。『婚約者』決定版に導入されたもう一つの要素として、言語的改訂が挙げられるが、これによって「地の文」の平易な標準語と引用された資料の17世紀の言葉は、同じイタリア語でありながら強いコントラストを生じさせ、それが迫真性を増していると考えられるのである。

こうした研究の成果は、現時点では一部分しか発表されていないが、まずは近刊予定の『汚名柱の記』翻訳の「解題」において紹介する機会が得られる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 霜田洋祐	4. 巻 60
2. 論文標題 疫病と集团的妄想--マンゾーニ『婚約者』に記されたペスト蔓延の要因について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日伊文化研究	6. 最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 霜田洋祐	4. 巻 131
2. 論文標題 マンゾーニ『婚約者』における歴史とフィクションの接続について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 霜田洋祐	4. 巻 69
2. 論文標題 フランドルの画家マンゾーニ：『婚約者』と17世紀絵画のリアリズム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イタリア学会誌	6. 最初と最後の頁 23-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 霜田洋祐
2. 発表標題 ペスト禍と冤罪事件の記録：マンゾーニ『汚名柱の記』のアクチュアリティ
3. 学会等名 世界文学学会関西支部第6回研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ジョヴァンニ・デサンティス、土肥 秀行（編）/石井元章、石田聖子、フランチェスコ・カンパニョーラ、菊池正和、國司航佑、霜田洋祐、高田和文、原基晶、星野倫、森田学、山崎彩（著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 344
3. 書名 イタリアの文化と日本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------